

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第170号

イザヤ 65:1

平成21年11月27日

主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。

さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。あなたは知っているか。だれがその大きさを定め、だれがその測りなわをその上に張ったかを。その台座は何の上にはめ込まれたか。その隅の石はだれが据えたか。そのとき、明けの星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ。

海がふき出て、胎内から流れ出たとき、だれが戸でこれを閉じ込めたか。そのとき、わたしは雲をその着物とし、黒雲をそのむつきとした。わたしは、これをくぎって境を定め、かんぬきと戸を設けて、言った。「ここまでは来てよい。しかし、これ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここでとどまれ」と。あなたが生まれてこのかた、朝に対して命令を下し、暁に対してその所をさし示し、これに地の果て果てをつかまえさせ、悪者をそこから振り落とさせたとあるか。地は刻印を押された粘土のように変わり、衣服のように色づけられる。悪者からはその光が退けられ……

あなたは海の源まで行ったことがあるのか。深い淵の奥底を歩き回ったことがあるのか。死の門があなたに現れたことがあるのか。あなたは死の陰の門を見たことがあるのか。あなたは地の広さを見きわめたことがあるのか。そのすべてを知っているなら、告げてみよ。光の住む所に至る道はどこか。やみのあるその場所はどこか。あなたはそれらを住み家に連れて行くことができるか。それらの住み家への道を知っているのか。知らないわけはないだろう。すでに生まれたのだから。あなたはもう長くいきているのだから。ヨブ記 38：1-21 (ゴシック体表記の 20、21 節は NIV 邦訳)

ヨブ記 38 章から 41 章にかけて神がヨブに語られたメッセージは、無知なくせに自尊心だけ強い私たち被造物に、大変な迫力で迫ってくる非常に科学的な七十七にわたる質問です。高度な文明の時代といわれている今日でもまだその多くが謎につつまれていて答えることができない科学の三十以上の領域にわたる質問を神はヨブに立て続けに問われたのでした。天地に対する科学的探究は、「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ……支配せよ」と、人類誕生の初めに神が、地の管理者である「人」に委任された合法的な学問でした。管理者として地を任された人間が神の創造のわざを理解し、真理を明らかにすることは、偉大なる創造者を再発見することであり、科学的発見を通して遠大な神の摂理やデザインの見事さをますます知ることができるはずでした。しかし、本来なら、神の尊厳と栄光への偉大なる証しであるはずの科学が、神を否定し、神の栄光に挑戦する人道主義者たちの学問であるかのように取り扱われてきたのです。科学と信仰が対立するかのような間違った思想が人間史を実に長い間支配してきましたが、昨今、多くの医科学的、考古学的発見によって、聖書の主張の正しさが立証されてきています。もはやだれも聖書を否定できなくなるときが急速に近づいているのです。これは、真理が現れると聖書が預言している「世の終わり」が非常に近くなっているということでもあるのです。

二十世紀に注目を浴び始めた「ビッグ・バン」理論は時空の突然の始まりと引き延ばされた天という概念が聖書的で、創造論者たちによって支持されているのですが、「とき」の長さの概念、天体の創造順が聖書と食い違うというまだ説明されていない点を残しています。他方で、二十世紀末に「ホワイトホール宇宙論」がラッセル・ハンフリーズによって提唱され、地球を中心として文字通り六日間で天地の創造が始まり終わったとする画期的な理論に創造論者の関心が高まっています。神による六日間の創造と七日目の休息を、ユダヤ教のラビたちは古代から、六千年の人類史と七千年目のメシヤ支配の神の国を象徴するものと解釈して、非常に若い地球を唱えてきましたが、紀元前四千年を人類の祖アダム創造の年とみなせば、現代はすでに六千年の人間史からメシヤの時代への境界線上に位置するわけです。今日がまさしく人間史の終わり、世の終わりであることは、聖書が裏づけているのです。また、ここでは詳細を省きますが、2345BCE頃、地球に小惑星激突が起り、地軸が大きく変動したことが、英国のストーンヘンジやエジプトのカルナクの「アメン神殿」の謎解明から明らかにされ、ちょうどノアの洪水の時期に一致することから、聖書に記されている出来事から割り出される人類史や地球の年数の正しさは今日、恐ろしいほど見事に立証されてきています。言うまでもなく、科学界では、「ホワイトホール宇宙論」はじめ、創造論を信奉する科学者の理論に対する攻撃が強いようですが、周辺的な研究からの相乗効果で聖書のすべての主張が裏づけられるのは時間の問題と言えるでしょう。

神と対等に論じ合おうと挑んだヨブに対して、神はまず、創造者と被造物の越えることのできない決定的な違いを教えられました。神の創造のスタートは地でした。神は人類が最高、最適な環境で住むことができるようにと、何もない空間に「水の面に円を描いて」(ヨブ記 25：10) 球状の地球を全宇宙の基として置かれました。

「主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り」(出エジプト記 20:11、下線付加) というモーセの主張を字句通り捉えるなら、創造の最初に天界の被造物「星々……神の子たち」、すなわち、御使いたちも造られ、神の創造の過程を楽しみ喜んだのでした。その後8節(冒頭の引用の第二段落)以降で、神がヨブを質問攻めにされたのは、天地創造という素晴らしい出来事の後、御使いの反逆と人間の墮落を経て、神が全地にもたらされた裁きの出来事、すなわち、神が人間史にご介入された「ノアの洪水」の出来事に関してでした。神の人類史への大きなご介入は次のように四つにまとめることができます。1. 天地創造 2. 人間に神への反逆の結果もたらされた「罪」、すなわち、「受肉したサタン」への滅びの宣言 3. 八人を除く全人類の反逆に対する「洪水」による裁き 4. 「罪」を最終的に滅ぼすためのキリストの受肉。明らかなように、罪のとりことなった人間を罪から完全に解放し、神の家族に招き入れ、永遠の御国を成就するためには、神の遠大な御計画を妨害した憎き敵「サタン」を滅ぼさなければなりません。ヘブル語聖書で一番古い書、イスラエルの族長時代を反映する「ヨブ記」には、この神の御計画の全容が表されているのです。ヨブ記は逆境にあつて悩める者に慰みを与え、励ます書である以上に、神がサタン退治の全容を明らかにされた書なのです。

創世記9章に記されているように、ノアの洪水後空に初めて現れた虹を神が、「二度と洪水では人を滅ぼさない」という人類との契約のしるしとされたということは、ここで言及されている「黒雲」が地に初めて雨を降らせて洪水を引き起こした雨雲であり、「海がふき出て、胎内から流れ出た」という表現は、地軸の急激なずれによって、天からの水よりも地表や地中の膨大な量の水がぶち空けられることによって、一瞬のうちに地を水がおおったということを物語っています。このとき、それまで比較的なだらかだった全地が高い山と深い谷、深い海で覆われる地球に様変わりし、地のアイソスタシー(地殻均衡)の原理によって説明されるように、まさに神が命じられた通り、海と陸との境界線は明確になり、もはや、地を滅ぼすような大洪水が起こることを不可能にしたのでした。地軸が回転することによって地に太陽が昇り、朝が巡ってくるのですが、神は、ノアの時代、おそらく小惑星を地球に激突させることによって地軸を急激に移動させ、地を揺さぶり大洪水を起こされ、その結果、太陽が違ったところから上ることになったのでした。このことを神が起こされたのは、当時、墮天使との神の摂理を曲げる反逆に加担して、全地を汚していた悪者を地から振り落とすためだったのです。古代、封印のために用いられていた円筒印章は柔らかい粘土版の上を転がすことによって、刻印したのですが、神は、そのように地球を転がし、水で完全に洗われた後、聖められた新しい地球に、悪に染まらなかった八人の「正しく、全き人々」を戻され、新たな人類史をスタートさせられたのでした。神のヨブへの挑戦は、地球の行動を変えることによって、暁、朝をもたらす太陽の動きに変化をもたらすこともできないような者が、神に口出しできるであろうか、ということでした。神は悪者を全地から一掃させるために、今後も天変地異、自然現象、気象現象を自由に用いられますが、究極的なご介入は、天からの「火」による裁きであることを聖書は明確に預言しています。しかし、それは地球自体が焼き尽くされる現今の宇宙の終焉の預言であり、その前に私たちには、イエス・キリストがこの世、地上に樹立される「千年支配の神の国」に入るという非常に近未来の大きな目標があるのです。

「海の源まで行ったことがあるのか……死の門……地の広さを見きわめたことがあるのか」と、神は、たかが被造物に過ぎない人間が知る由もない地の隠れた部分、計り知れない大きさ、次元を超えた領域にヨブの視点を移動させられます。自分の殻に閉じこもって、自分の問題ばかりに悶々としていないで、神の大きな度量に委ねなさいとヨブに語りかけておられるようです。現代科学にとって「死」は依然として謎です。光の性質に関しては、電子などを含めたミクロの全物質に共通して、波動と粒子の両方の特徴をあわせ持つこと、粒子の非局所性ということまでは量子力学が明らかにしているのですが、ミクロの物質のスタート点とゴール点は認識できても「光の住み家への道」(下線付加)と神が言われた「経路」の観測は未だできていないのです。この世はプログラムの世界、すなわちどの部分を取り出しても全体が再現できる世界であると科学者たちは言いますが、それは、一人の創造者の一貫したデザインが天地のすべてに、また、人間史にも反映されているからなのです。もっと分かりやすく言えば、この世はまさに「金太郎あめ」、どこを取っても神の御許、天にある本物のひな型が反映されているのです。地の広さを測ることに現代科学は成功しましたが、驚くべきことに、エノクが建て、また、ノアの大洪水を生き残ったと思われる「ギザの大ピラミッド」の底辺には、建てられたときすでに地球の大きさが反映されていたことが明らかにされたのです。230mの正方形の底辺は不思議なことに直線ではなく、ほんの少し両端より内側に入るカーブを描いているのですが、これはまさに地球の外周に符合するカーブでした。このように私たちは、創造者の奇しき御手を今後も引き続き発見していくことになるでしょう。【ギザの大ピラミッドの不思議に関して「一人で学べるイザヤ書」、ヨブ記の解説に関してはフルダレター82、83号をご覧ください】



暗闇から光を切望する時節がまた巡ってきました。

世の光、イエス・キリストは、人類の救いのため手を差し伸べておられます。

主、イエスを受け入れ、信仰、希望、愛が、

皆様の心に灯される時節となりますようお祈りいたします。